

資本主義を脱線する ― 脱成長と人間の解放 ―

茂木 康

2025 年 8 月 31 日

ここ数年、私は二つの問題について考え続けてきました。一つは、「人間の解放とは何か」、「解放闘争がめざす社会はどのようなものか」ということです。以前であれば、「階級の廃絶」とか、「私的所有の廃止」とか、「価値法則の廃絶」といったマルクス主義左翼の常とう句でお茶を濁していたのですが、どうもしっくりこない。そこでいろいろと考えた挙げ句にたどり着いたのが「人はすべて生きるに値する人生を全うする権利がある」、「生きるに値する社会を目指すべきだ」ということでした。これに反対する人は誰もいないはずなのに、いざ実現しようとするのとてつもなく難しい。近代民主主義は、フランス革命の「自由・平等・博愛」の三つの理念を体现しているはずですが、実体はその理念からかけはなれている。なぜそうなっているのか。そもそも「近代性」（マルクス主義もそのカテゴリーに収まっているのですが）に関して私たちが了解していたことが、根本的に間違っていたのではないか。それが一つ目の問題です。

もう一つは、私たちは資本主義社会に生きているわけですが、「もしもすべての人びとが資本の論理に忠実に従うならば、この社会は一瞬で崩壊してしまうのではないか」という考えです。実は、ほとんどの人たちが「弱肉強食」の競争原理に従わずに、もちつもたれつ関係でやっていることによって、資本主義は成り立っているのではないか。この「もちつもたれつ」はいわゆる「ウィンウィン」とは違います。どちらかといえば「相互扶助」に近い関係です。このように一つ社会のなかで相反する二つの原理が並立し、しかも依然として資本主義が持続しているのはなぜなのかということです。

この二つの問題への実践的な回答が「脱国家」であり「脱成長」です。なぜそうなるのかをこれから述べます。参考にしたのは、デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウエングロウ『万物の黎明 人類史を根本からくつがえす』、タルコット・パーソンズ／ニール・J．スメルサー『経済と社会』、モイシェ・ポストン『時間・労働・支配—マルクス理論の新地平』です。

未開と啓蒙の弁証法

それではまず、近代の理念、「自由・平等・博愛」について、特に民主主義にとって重要なキーワードである「平等」について考えていきたいと思います。人間は一人一人が千差万別であり、それぞれ唯一無二の存在であるのにもかかわらず、何を持って「平等」というのでしょうか。それは「結果の平等」を指しているのか、「機会の平等」を指しているのか。そもそも私たちはいつから「平等」という観念を重視するようになったのでしょうか。

その問いに多くの人が思い浮かべるのがジャン＝ジャック・ルソー（1712–1778）の『人間不平等起源論』だと思います。ルソーがこの本を著した 1754 年当時のフランスはルイ 15 世の絶対王政の下にあり、そのような社会で「人間たちのあいだにある不平等の起源はなんであるか」

という問いを発すること自体が、人びとにとってはかなり意表をつくものだったようです。^(＊1)にもかかわらず18世紀のフランスで、なぜ、「不平等」が争点となったのか。デヴィッド・グレーバー（1961－2020）は、そのきっかけとなったのは、当時のヨーロッパにもたらされていたアメリカ先住民の情報や実例だったといいます。先住民の社会や思想が主要な啓蒙思想家たちを触発し、彼らをして個人的自由と政治的平等の理想を語らせたというのです。

当初、アメリカ先住民とフランス植民者との間では、「平等」について語られることはあまりありませんでした。主に交わされていたのは「自由と相互扶助、あるいは自由とコミュニズム」をめぐる議論だったようです。ここでいう「コミュニズム」とは「他人のニーズが十分に大きく（たとえば、溺れそうになっているとか）、そのニーズを満たすためのコストがさして大きなものではない（たとえば、ロープを投げてほしいと頼まれたとか）、そのようなばあい、常識ある人間ならば、[その要請に] 従うはずだ」という感覚を指しています。グレーバーはこれを基盤的なコミュニズム（baseline communism）と呼んでいます。それは「個人の自由と対立するものではなく、むしろ個人の自由をささえるもの」であり、すべてが、「だれの意味も別の人間の意思に服従することのないように運営」されるような政治システムをさしています。^(＊2)

先住民たちは誰もが、自身の判断によって「命令に従うか、従わないか」を決めることができました。こうした強制のない社会が一つにまとまるためには、「理に適った議論や説得力のある議論、社会的コンセンサスの確立」が必要になります。そのため、彼らは当時のヨーロッパ人が驚嘆するような政治家であり雄弁家であり、哲学者でもあったのです。^(＊3)

当時のヨーロッパは、財産を所有する権力が、直接他の人間を支配する権力となる世界でした。このような世界に住んでいたヨーロッパ人は、先住民社会のありように強烈な印象を受けました。彼らはこう自問します。「われわれヨーロッパ人とアメリカ人（先住民）とでは、一体どちらの社会のほうが『自由で平等な社会』なのだろうか」と。

これ猛反発して、先住民社会の優位性を認めず、「未開人の自由と平等はかれらの優越性ではなく、劣等性の証である」と唱えたのが、啓蒙思想家で重農主義者のジャック・テュルゴー（1727－1781）でした。彼は「社会の進化はつねに狩猟者からはじまり、牧畜、農耕を経て、現代のような都市商業文明の段階にいたる」と主張しました。未開人の単純社会は、技術の進歩と分業の広がりによって複雑な「商業文明」へと発展していくのであり、高度に発展した文明では、「嘆かわしくはあれど、一部の人間の貧困や窮乏が、社会全体の繁栄のための必要条件となるのだ」と説きました。この思想は現代まで続く「社会進化論」の原型となりました。^(＊4)それは次のようなものです。

「狩猟採集社会から農耕社会へ、農耕社会から工業社会へ、という人類進化の道筋は必然的なものである。その進化に伴って『生存をかけた闘争』から解放された人類は、その人口を飛躍的に増大させた。人口増加によって大規模化・複雑化した社会を運営するために、中央集権的な国家、官僚制、ヒエラルキーが必要不可欠となったのだ」と。私たちはこのような社会進化論を信じ込んできました。そして私たちは、「自覚的な平等主義が大きなスケールでどのように機能し

うるのか」を想像することすら困難になっているのです。

ほんとうに社会進化論が示すように狩猟採集社会は農耕社会よりも「貧しい社会」なのでしょうか。「そうではない」と主張したのが、新進化論者のマーシャル・サーリンズ（1930－2021）でした。彼は、「豊かさ」とは、「幸せで快適な生活を送るために必要とおもわれるものがすべてかんたんに手に入る状態」のことだと定義しました。この定義に従えば、「よく知られた狩猟採集民の多くが豊かである」ことがわかるのです。

狩猟採集民たちは、穀物や野菜の栽培法を知らなかったわけではありません。むしろ完全に理解していました。にもかかわらず、彼らはあえて農耕に踏み出そうとしなかったのです。なぜでしょうか？ 彼らの答えはこうです。「世界にはモンゴンゴの実がたくさんあるというのに、なんであえて栽培しなきゃならないんだ？」と。「ナミビアやボツワナの砂漠のような人を寄せつけない環境であっても、狩猟採集民は集団全体をさしたる苦もなく養うことができ、なおかつ週3日から5日は、噂話をしたり、議論したり、ゲームをしたり、ダンスをしたり、趣味の旅をしたりといった、とびきり人間的な活動をおこなう時間」にあてることができていたのです。彼らには、こうした快適な生活を捨てて、一カ所に定住し、農耕の労苦に甘んじる理由がどこにもなかったのです。狩猟採集民たちは「みずからの余暇を維持するために新石器革命（農耕革命）を拒否した」。これがサーリンズの結論です。（*5）

人が生きるに値する社会

多くの人類学者や考古学者の発見と研究の成果によって、過去3万年のあいだ、人類社会は、社会進化論が想定する「狩猟採集—農耕—都市商業—工業」という単線的かつ不可逆的なコースを歩んできたわけではないことが明らかになってきました。ところが、現在、かつて存在した多彩な社会のバリエーションを見ることはほとんどできません。私たちが目にするのは、国家・官僚制・ヒエラルキーという不平等に甘んじている人びとばかりです。それがアメリカ先住民社会が実現していた「自由・相互扶助・コミュニズム」を諦めることによって、近代人が手に入れたとされる社会なのです。これが本当に生きるに値する社会なのでしょうか。次にこのことについて考えてみたいと思います。

「国家・官僚制・ヒエラルキー」といえばピラミッド型の社会です。多くの人びとはピラミッド型社会こそが社会のノーマルな姿だと思っています。ところが、タルコット・パーソンズ（1902－1979）が描いた社会の概念図はこうした常識とはかなり違ったものでした。

1950年代の前半、パーソンズは小集団の実験的研究に取り組んでいた弟子のロバート・ベイルズ（1916－）らと共同研究を行い、あらゆる社会システムに必要な機能を「適応（A）」・「目標達成（G）」・「統合（I）」・「潜在的パターンの維持と緊張管理（L）」の四つに分類しました。それを図式化したものがAGIL図式です。（*6）パーソンズはそれぞれの機能に該当する活動を次のように振り分けます。「適応（A）」機能には主に経済とその科学、技術的側面が該当します。

「目標達成（G）」機能は主に政治が該当し、特に政府によって遂行されます。「統合（I）」機能

には文化が該当し、公教育、宗教、マスコミなどによって遂行されます。そして「パターン維持 (L)」機能には家族および家計が該当します。

ここで目を引くのが、経済が政治（政府）や文化（公教育・宗教・マスコミなど）や家計（家族）と並んで、社会システムのなかに埋め込まれていることです。これは、「経済が社会の中で支配的な位置を占める」という資本主義の一般的なイメージとは明らかに異なっています。

一方で、社会的再生産やケアに相当する「パターン維持」機能に、もっぱら「家計・家族」が割り当てられていることに違和感を覚えずにはられません。政治学者のナンシー・フレイザー（1947－）は社会的再生産やケアについて次のように述べています。「〔それは〕人間を具現化された自然的存在として維持するいっぽう、社会的存在としても構成し、活動の基盤となるハビトゥス（社会構造の身体化）と文化的^{エトス}精神とをかたちづくる。このプロセスの中心は、若い世代を産み、社会化を促すことだ。そしてまた年配者の世話や家庭を切り盛り、コミュニティの構築を図るとともに、社会的協働を支える共有を促し、情緒的な性向を養い、価値体系の豊かな広がりをも育む」と。^(*)7)つまりそれなしには社会が社会として成立しないような、社会の基盤を形成する重要な活動なのです。資本主義は社会的・公的活動の責任を「家庭」という私的活動に切り縮めているのです。しかもその活動はもっぱら女性たちの無償労働によって支えられているのです。パーソンズは資本主義社会の機能分化を忠実に再現することで、はからずも資本主義経済が女性たちの再生産労働やケア労働に「フリーライド（ただ乗り）」している事実を可視化したといえるのかもしれませんが、重要なことは、資本の蓄積には、無償の、あるいは甚だしい低賃金の社会的再生産労働、ケア労働が不可欠であるということです。つまり、資本主義は生産過程の搾取だけでなく、再生産過程の収奪によって成立しているのです。

経済人類学者のジェイソン・ヒッケル（1982－）は、幸福度と並んで、『人生の有意義さ』に注目すべきだという主張を紹介しています。人が「有意義な人生を送っている」と感じるのは「思いやり、協力、コミュニティや人とのつながりを体現している時」であるということです。^(*)8)まさにそれは社会的再生産、ケアの領域です。だとすれば、すべての「人が生きるに値する人生を全うできる」ような社会の実現を阻害しているのは、社会的再生産労働やケア労働に収奪の対象としか見ていない資本主義経済だということにならないでしょうか。

国家の死滅は可能か

さて、この AGIL 図式に注目し、独自の政治理論を構築したのが政治学者のカール・ドイッチュ（1912－1992）でした。ドイッチュはパーソンズと共同研究も行っていました。

ドイッチュは社会内部における暴力の行使について興味深い考察を行っています。ある社会で内乱や暴動が発生したとき、物理的力（権力）を行使してこれを鎮圧する役割を果たすのは軍隊や警察です。一般的にその物理的力による威嚇は、内乱や暴動を予防する効果があると考えられていますが、ドイッチュは「必ずしもそうではない」といいます。彼は、「概して、物事を正常な状態において動かし続けているものは、威嚇というよりはむしろ調整された習慣なのである」

と。たとえば車のドライバーがみだりに赤信号を無視したりしないのは、順調な交通の流れを確保することに重きを置いているからであり、そのような合意がドライバーどうしのあいだで形成されているからです。ドイッチュはそれを社会的コミュニケーション習慣と呼んでいます。彼はこうした習慣が果たしている役割を重視します。それに比べると、罰金や逮捕の威嚇が果たす役割は無視はできないとしても、その影響は大したものではないということです。

ドイッチュは軍隊や警察をその実体とする権力を、一般に考えられているような「オールマイティ」なものとは見ていません。ドイッチュに言わせれば、それは「政治が目標を達成するために必要な影響力を失ったり、習慣が損なわれたり、あるいは自発的な調整ができなくなった場合にその機能を補ったり、損傷を制御するための機構の一つ」にすぎないのです。したがって、権力は確かに重要なものではあるが、それは「政治の中心でもなければ、また本質でもない」とドイッチュは断じています。(*9)

さらにドイッチュは、「社会的コミュニケーション習慣に重きを置くという思考を進めていけば、国家の強圧的な側面が後退していくのではないか」という興味深い議論を展開しています。

「富や教育の発展・拡充、文化的・社会的統合の進展とともに、政治の強圧的側面が後退」していき、国家の強圧的な側面も「最終的には死滅する」という、マルクスやエンゲルスが投げかけた「長年の論議に何らかの示唆を与えてくれるかもしれない」と述べています。「長年の議論」とはレーニンが『国家と革命』で論じた「国家の死滅」にかかわる議論です。(*10)

驚くべきことに、ドイッチュはAGIL図式を「国家の死滅」という問題に対して開かれた体系として捉えているようなのです。なぜ彼は、AGIL図式を開放的に捉えることができたのでしょうか。それはこの図式の構造にあるのではないかと思います。

AGIL図式では、社会を成立させている四つの機能が割り当てられた下位システム（経済、政治、文化、家計）が、それぞれの下に同じような四つの下位システムを有しています。そしてその下位のシステムも同じパターンを繰り返していくのです。パーソンズの定義によれば「社会システムというのは、社会的・文化的な水準における、2人若しくはそれ以上の『行為者』のあいだで行われる、なんらかの相互行為の過程によって生ずるシステムである」(*11)ということですから、理論的には国家という非常に大きな単位から、極めて少人数の社会の最小単位までAGILのパターンが繰り返されるということになります。

このようにパーソンズが描く社会像は、全体と部分が相似形（自己相似）になっています。このような複雑さを持った図形をフラクタルといいます。自然界には多くのフラクタルが存在しています。海岸線、河川、動物の肺や血管の構造、多くの草や木の分岐、さらには宇宙空間の銀河の空間的分布などがフラクタル的性質を持っています。また全体が部分と相似であるという世界観は古くから数多く存在しています。典型的なものとしては仏教の教え視覚化した「曼荼羅」があります。その大小の円を組み合わせた構図はまさにフラクタルであると言えます。(*12)

社会の構造がAGIL図式で表されるようなフラクタルであるとすれば、「規模の小さな社会で権力（暴力）の行使がほとんど行われないのはなぜか」ということが原理的に明らかにされ

ば、より大規模な社会（例えば国家）に対してもそれを適用できることになります。ドイッチュはその原理が社会的コミュニケーション習慣（典型的には言語）にあるとみなしました。そして彼は 1950 年代に、この考え方を国際社会に拡張して超国家的な組織を必要としない「安全保障共同体（security community）」という概念を提示しました。安全保障共同体とは、「すでに統合している集団」のことです。ここでいう「統合」とは、「公式・非公式の制度・慣習が伴った共同体意識、『長い』期間にわたって『無理ない』確実さでもって集団構成員どうしの平和的変更を保証するために十分に強固で広範な意識」に到達していることを指します（*13）。こうした「統合」の捉え方にはパーソンズの AGIL 図式の影響がはっきりとうかがえるのではないのでしょうか。

軌道からの脱線

私たちが生きている社会は、実は「国家の死滅（＝真の自由！）」に向かって開かれたフラクタルな構造を持った社会であるとしましょう。ところが、この「開かれた社会」の住民たちのほとんどは、「国家の存在しない社会」を想像することすらできなくなっています。これは、いったいどういうことなのでしょう。「社会はフラクタルだ」という仮説が間違っているのでしょうか。それとも他に理由にあるのでしょうか。

その理由は恐らく資本主義社会にあるのだと思います。最後に紹介するのは、モイシェ・ポストン（1948－2018）の『時間・労働・支配』です。ポストンによれば、資本主義とは工業的生産のことです。工業的生産は、生産力の増大によって労働者の再生産に必要な諸商品の価値を減少させます。そうすることで必要労働時間を減少させて、剰余労働時間を増大させる（相対的剰余価値の生産）という特殊な生産様式のことです。社会的生産が、このような相対的剰余価値の生産という「軌道」にのり、生産力の指数関数的な増大を引き起こすと、物質的な富の生産にはたす直接的な人間労働の役割は限りなく小さくなっていきます。しかし価値の増殖は依然として抽象的人間労働（労働時間の支出）に依存し続けています。こうした価値増殖過程における労働の目的は労働時間を対象化すること、すなわち、労働者がひたすら時間を費やすことが目的になっているのです。そして実際にその労働が有益なものかどうかということは問題にならないのです。そして価値増殖過程における生産力の機能は、生きた労働を可能なかぎりなく「吸い尽くす」ことです。（*14）これこそが資本の自己増殖過程の正体であり、「経済成長」の実体なのです。

このような労働は、資本主義社会以外の社会では見られない特殊歴史的な労働です。労働が価値増殖過程の源泉となり、労働者に対する支配の構造的源泉となっている社会。階級闘争をも相対的剰余価値の増大に転化してしまう社会。しかも資本主義によって実現した高度な工業文明こそ人類最高の到達であると多くの人びとが信じて疑わない社会。資本主義に対して多少の疑問を抱いている人でも、この高度な文明を棄てて、「未開社会に後戻りする」ことなどは絶対に不可能だという信念を抱かせる社会。このような社会のなかで人びとは、「経済成長」以外のことに視野を広げたり、想像力を働かせたりすることが困難になっているのではないのでしょうか。

ポストンは、人間の解放の条件は、資本主義社会に特殊歴史的な労働と、それを担うプロレタリアートを廃絶し、価値そのものを廃絶することだと述べています。どういうことでしょうか。人間から自由を奪っている「鉄鎖」とは「工業的生産の軌道」のことなのです。だから人間の解放とは、端的に言って、「工業的生産の軌道」から外れること、「脱線」することなのです。

人間の原初的な自由

そもそも、人間の解放、人間の自由とは何でしょうか。グレーバーは人間の原初的な自由として次の三つをあげています。①移動する自由、②服従しない自由、③社会的関係を創造したり、変化させたりする自由です。(*15)

「移動の自由」とは不当な拘束や抑圧から逃れる自由です。それは「服従しない自由」と不可分のものです。そして「移動の自由」と「服従しない自由」がなければ、「社会的関係を創造したり変化させたりする自由」は成立しません。

この自由の定義を、「資本主義からの解放」に適用すればどうなるか。それは、資本主義の本質である「工業的生産の軌道に唯々諾々と従うのはもうやめて（服従しない自由）、軌道そのものから外れてしまおう（移動の自由）」ということではないでしょうか。それが「脱線」です。

「脱線」することによって、資本主義に代わる新たな社会の創造が始まるのです。

2011年のウォール街の占拠闘争は「脱線」の可能性を垣間見せました。この闘争の特徴の一つは、占拠に加わるために「脱線した」（仕事を辞めた）人たちが全米各地から集まってきたことでした。占拠闘争の運営の仕方も、全員参加のアセンブリ（全体会議）で決定するなど、既成運動の常識からも著しく「脱線」していました。実際にさまざまな混乱もあったようですが、確かなことは占拠闘争に参加した人びとが新たな社会関係の創造に積極的に取り組んでいたということです。

確かに、巨大な資本の力を前にした時に、こうしたささやかな実験にどれほどの意味があるのかという疑問も当然生まれて来るでしょう。しかし、資本主義が実現した途方もない生産力（巨大な資本の力）が、地球上で生きている人間も含めたすべての生命体にとって本当に必要なものなのかどうかということを、いまこそ真剣に考えてみるべきではないでしょうか。その中には今すぐにでも廃棄すべきものが大量にあるのですから。

それを誰にでも分かる形で示したのが福島原発事故でした。私は震災から1年後の2012年3月11日、福島県郡山市で行われた「原発いらない福島県民大集会」で発言した女子高校生の言葉を今でも鮮明に覚えています。福島第一原発直近の富岡町で被災し、自分の友人を失った彼女は、「原発がなければ、津波や倒壊の被害にあったひとたちを助けに行くことができました。それを思うと、怒りと悲しみでいっぱいです。人の命を守れないのに電力とか、経済とか言っている場合ではないはずです」と言ったのです。

当時、福島県の避難者は16万人を超え、原発事故の原因はおろかその様相すら全くわかっていないという状況でした。にもかかわらず、「今後の日本経済の見通しはどうなるのか」「どうや

って必要な電力を確保するのか」という政府や財界の議論が幅をきかせ、停止中の大飯原発の再稼働に向けた動きが進んでいました。

原発再稼働を必要とする「経済」とは何か。それは毎日テレビニュースで流されている、「日経平均」であり「東証株価指数」であり「為替相場」の「値動き」のことです。これらは人びとの実生活とは何の関係もない単なる「数値」に過ぎません。これに対して、彼女はストレートな怒りをぶつけたのです。「こんな『経済』なんて、自分たちの大切に命にくらべれば何の価値もない！」と。それは、この期に及んでも、「経済成長」が命ずるままに原発を再稼働しようとしている大人たちへの根底的な怒りの爆発でした。13年前の彼女の怒りは、いま世界中で気候正義を求める若者たちの怒りへとつながっていると思います。

結語

以上述べてきたことに踏まえるなら、資本主義的生産＝工業的生産の軌道から「脱線」するところ、**「すべての人が生きるに値する人生を全うすることができる社会」**への第一歩だと思います。それは工業文明を棄てて、もう一つの世界をめざすことであり、「脱成長」という概念に集約できると思います。その第一歩を踏み出すためには、工業文明以外の社会を「未開」「蒙昧」とする社会進化論やさまざまな進歩主義など資本主義を擁護するイデオロギーと闘わなければなりません。そのためには、資本主義社会＝工業文明以外の社会、「未開」や「蒙昧」された社会とその住民たちの豊かさから学ぶことが必要です。それは同時に強固なヒエラルキー信仰、国家信仰との闘争でもあります。

これらあくまで仮説です。それが真であるかどうかは、「脱工業文明」「脱成長」を指向する運動が人びとを捉え、「脱線」を世界を変革する力へと転換できるかどうかにかかっています。

グレーバーは『万物の黎明』の最後で、量子論の創始者である理論物理学者のマックス・プランクの言葉を紹介しています。

「あたらしい科学的真理は、既存の科学者に、それがまちがっていたことを納得させることで古いものにとって代わるのではない。古い理論の支持者がやがて死に絶え、後続の世代があたらしい真理や理論を身近で明白なものと感じることで、そうなるのだ」(*16)と。

楽観主義者の私はグレーバーと同じように、「そうなるのにさして時間はかからない」と考えているのですが、みなさんはどうでしょうか。(了)

行為の体系の機能的命令

A 適応機能 経済とその科学、 技術的側面	G 目標達成機能 政治、社会の政治 的下位システム、 特に政府によって 遂行される
L パターン維持機能 家族及び家計の下位シ ステムによって遂行さ れる 子どもの養育、 労働力の回復、親族集 団持続に関連する社会 的諸要素	I 統合機能 公共的及び準公共的な 教育、宗教、マスコミ などの社会的諸制度を 含む文化の下位システ ムによって遂行される

A 環境その他の変化に対する適応 (Adaptation)

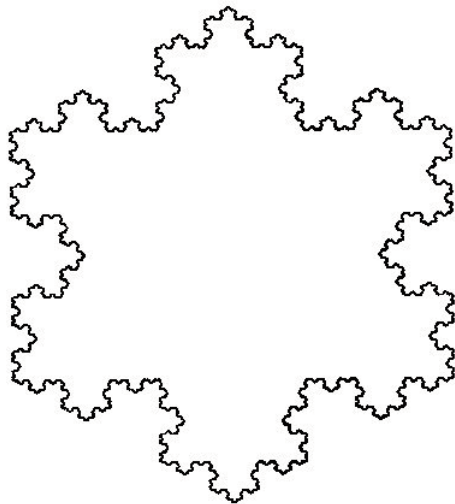
G 社会システムが受け入れ、あるいは自ら設定した目標の達成 (Goal Gratification)

I 社会システム内の異なる機能と下位システムのすべてを凝集的で関連付けられた全体へともたらず結合 (Integration)

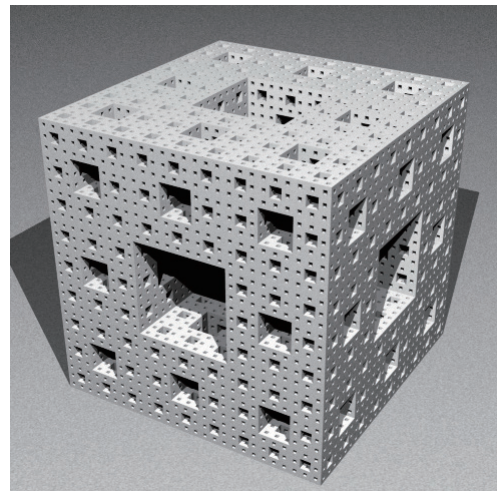
L 社会システムそれ自身の潜在的パターンの維持ないし再生産
 および緊張の処理
 (Latent-Pattern Maintenance and Tension Management)

※T. パーソンズ／N.J. スメルサー『経済と社会 I』（岩波書店、1958 年）p30 および K.W. ドイツ
 チュ『サイバネティクスの政治理論』（早稲田大学出版部、1986 年）p154 をもとに作成

フラクタル



コッホ曲線



メンガーのスポンジ



曼荼羅

(* 1) デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウェングロウ『万物の黎明 人類史を根本からくつがえす』(酒井隆史・訳、光文社、2023 年) p33

(* 2) 同上 p55－56

(* 3) 同上 p52

(* 4) 同上 p69

(* 5) 同上 p156

(* 6) 高城和義『パーソンズとアメリカ知識社会』(岩波書店、1992 年) p 240－241

(* 7) ナンシー・フレイザー『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』(江口泰子・訳、ちくま新書、2023 年) p 104

(* 8) ジェイソン・ヒッケル『資本主義の次に来る世界』(野中香方子・訳、東洋経済新報社、2023 年) p 187

(* 9) K.W.ドイッチュ『サイバネティクス of 政治理論』(伊藤重行ほか・訳、早稲田大学出版部、1986 年) p 162

(* 10) 同上 p 163

(* 11) T.パーソンズ／N.J.スメルサー『経済と社会 I』(富永健一・訳、岩波書店、1958 年) p 15

(* 12) 高安秀樹『フラクタル』(朝倉書店、1986 年) p 176

(* 13) 山影進『対立と共存の国際理論 国民国家体系のゆくえ』

(東京大学出版会、1994 年) p194

Deutsch 1954, Political Community at the International

Level : Problems of Definition and Measurement, Garden City, N.Y.: Doubleday

(* 14) モイシェ・ポストン『時間・労働・支配—マルクス理論の新地平』(白井聡／野尻栄一・監訳、2012 年) p544

(* 15) デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウェングロウ前掲書 p485

(* 16) デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウェングロウ前掲書 p592